

うぐひす
鶯



はるがすみ
春霞
流れるなへに
青柳の

あおやぎ

えだ
枝ぐひ持ちて
鶯
うぐいすな
鳴くも

卷十一 一八二一 作者未詳

歌意 春の霞が流れるとともに、青柳の枝を口にくわえては、飛びつつ鶯が鳴くことよ

春霞、青柳の若葉、鶯の囀りと春らしさが漂います。ただ、枝を啜えて鶯が鳴くものだろうかと思ふ人もあるかもしれませんが、これは昨鳥文という図様を模したものです。

花喰い模様は、正倉院宝物の金銀平脱背八角鏡、紅牙撥鏤尺などに出てきます。

鳥はヤツガシラ、キンケイ、サンジャク、インコ、クジャク、オシドリ、カモ、キジ、クジャクなど多彩。起源はササン朝ペルシヤで、力の誇示、豊饒、予祝、信仰から興り、8世紀になり、シルクロード上の各地の織物、金属製品、壁画などに登場します。東の果ての日本には、仏教美術と重なって、中国、韓国から伝えられたようです。